

循環型の家づくり

【取組み内容】

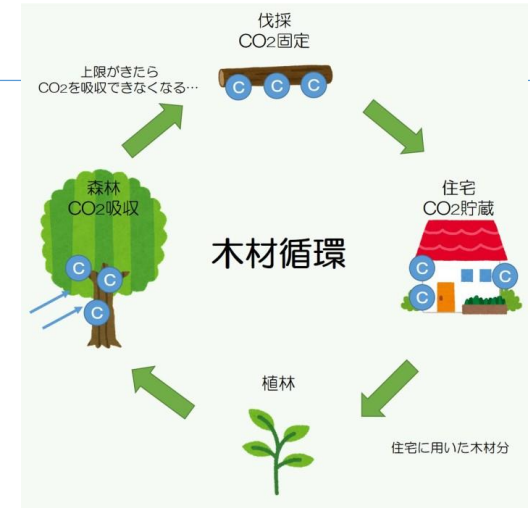
・住宅を建てる際に**使用した構造材分の苗木を寄贈**

寄贈先：熊本県上球磨森林組合、熊本森林組合 他

寄贈本数：前年度完工棟数（全事業所）×96本分

・新しい苗木植えることで**成長期に多くの炭素を吸収**

木が伐採、住宅に木材として使用されている間も炭素は固定されたままになるため、「第二の森林」として脱炭素社会の実現に貢献



「CO2貯蔵庫としての住宅」という発想

伐採と植林の管理が大気中のCO2を減らす

●森林を伐採しない場合  
伐採しない森林はCO2を吸収し続けるが、伐採された木材は分解されCO2を放出する。森林を伐採しない大気中の炭素ガス量は変化しない。

●植林と伐採の管理を行った場合  
伐採された木材は住宅に使用され、CO2を貯蔵する。植林により新たな森林が形成され、CO2を吸収し始める。大気中の炭素ガス量は減少する。

本紙CO2を完全削減し、ゼロカーボン社会という形を想定します。成長期の木は多くのCO2を吸収するため、樹木の伐採と植林による森林の管理が大気中のCO2を減らします。そして、伐採した木を使い住宅を建てることで、CO2を長期的に貯蔵して地上にストックできます。また、リフォームにより住宅の耐用年数を延ばすことで、地上のカーボンストック量が更に大気中のCO2濃度削減につながります。植林、材木としての耐用年数が100年以上（伐採率は1400年）であるため、住宅をCO2の貯蔵庫として機能させるための材料として選んでいます。

評価項目ごとの取組みの特徴・ポイント	
普遍性	住宅1棟ごとにCO2蓄積量証明書を発行→森林の重要性を伝える
包摂性	FFGと協働し、PIF評価書を発行→SDGsの輪が広がる
協働性	苗木を仕入先の森林組合に寄贈、新入社員研修では植林を実施する→SDGsのゴールに貢献、木を大切に考える考え方を受け継いでいる
統合性	木材循環システムの構築により経済、社会、環境それぞれゴールに貢献→住宅を建て続けることが木材循環サイクルの継続に繋がっている
透明性	自社のHP、SNSに取り組みを公開→情報の開示、第三者評価により透明性を確保している

貢献するSDGsのゴール